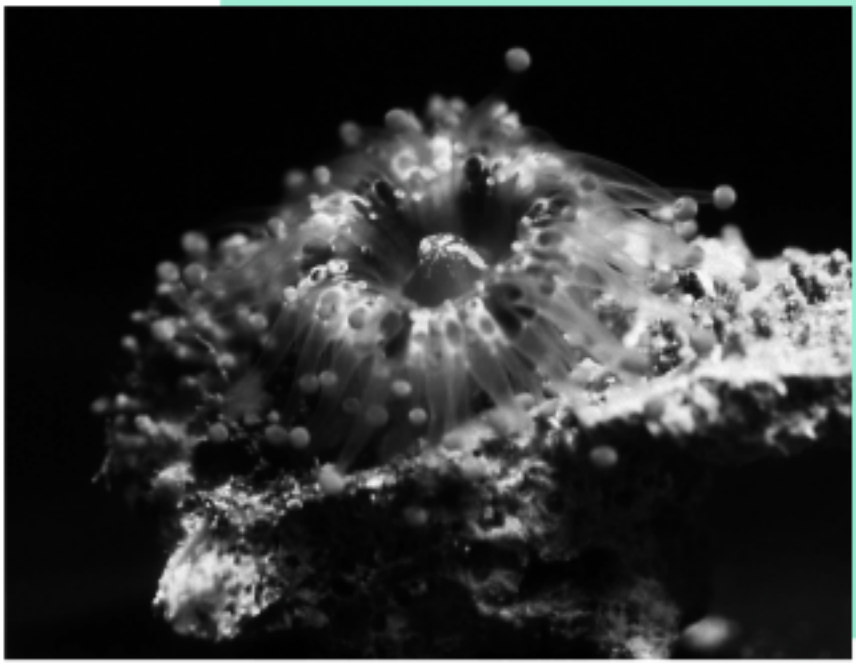
日本財団 助成
The Nippon Foundation

夜間観察で見つかったホネナシサンゴ科の一種

Underwater observation of a species of coral anemone, Corallimorphidae at night



阿嘉島臨海研究所では、毎年夏になるとサンゴの産卵調査のために満月前後の数日間、夜間潜水観察にでかける。けれども、毎晩サンゴの産卵が見られるわけでもなく、むしろ見られないことの方が多い。目的を果たせないのは残念なことだが、そんな日は他の生物の夜の姿を観察する絶好の機会でもある。夜にこそ、その本来の姿を見せる生物も多い。このホネナシサンゴの一種も、そうした生物の一つで、昼間はしぼんで瘤のような形をしているが、夜になると先端に鮮やかなオレンジ色の球をもつ触手を伸ばし、"花"を開く。この触手先端の球が、ホネナシサンゴ科の大きな特徴の一つである。写真の個体は、直径約1.5cmで赤紫色をしているが、直径1cmほどでオレンジ色の体をもつものも見つかっている。この2つの個体は、おそらくは別種のものと思っているが、写真からこれがホネナシサンゴの仲間であると判定して下さった千葉県立中央博物館の柳　研介博士によると、その分類は現在大変混乱しているらしい。

採集・撮影：岩尾研二
日時：2002年7月29日
採集場所：阿嘉島　マジャノハマ

編集後記

編集　岩尾 研二（研究員）

"ウミマジムン"という言葉をご存じでしょうか。座間味でのオニヒトデの地方名で、「海の魔物」という意味です。その名のとおり、おととしの秋から"ウミマジムン"は、慶良間の海を荒らしまくっています。本誌の中で述べられているとおり、座間味村でもダイビング協会の方々を中心とした駆除活動に大きな努力が注がれていますが、それにもかかわらず、今もたくさんのサンゴが被害に遭っています。今年の夏には、いったいどれくらいのサンゴが生き残って産卵できるのでしょうか。本誌で紹介されたCREOの活動によって、慶良間の海が沖縄本島に幼生を供給する源であることが、よりはっきりしてきました。沖縄本島周辺のサンゴ礁のためにも、早く健全なサンゴ礁にもどって欲しいものです。今回は、小笠原諸島と千葉県館山のサンゴについての話題も寄せられました。和歌山県串本の方では、平均水温が上昇しているのか、これまであまり見られなかったサンゴ種が増えているそうです。先の2つの海域のサンゴの生息状況が、これから変化していくのか、大変興味がもたれます。願わくば、黒潮に乗って"ウミマジムン"が運ばれませんように。

発行人
ESTABLISHMENT OF TROPICAL MARINE ECOLOGICAL RESEARCH
財団法人熱帯海洋生態研究振興財団
〒141-0031　東京都品川区西五反田1-26-2 五反田サンハイツ614号　TEL. & FAX. 03 -3490-7266
AKAJIMA MARINE SCIENCE LABORATORY
阿嘉島臨海研究所
〒901-3311　沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179　TEL. 098-987-2304 FAX. 098-987-2875
E-mail: amsl @ ryukyu.ne.jp　Homepage URL: http://www.amsl.or.jp